



口蓋裂の言語臨床 第2版

岡崎恵子, 加藤正子 (編)
B5 型 184 頁 2005 年
定価 5,250 (本体 5,000 + 税 5%)
医学書院・刊

本書は、1997 年に出版された第 1 版の改訂版である。第 1 版は口蓋裂の言語臨床家として実績を積み上げた著者たちが口蓋裂言語に関する諸問題を包括整理し、臨床経験と併せて世に出したものである。その後 8 年の時を経て著者等の実績にも、臨床に加えて若い臨床家や学生の指導教育活動が増えてきている。

第 2 版では最近 8 年の新しい知見を加えると共に、後進の育成という意味を含めて新しい著者数名が加わっている。第 2 版の構成も初版と同じ 11 章から成る。すなわち「1 章. 口蓋裂治療における言語臨床家の役割」、「2 章. 口蓋裂の言語治療に必要な基礎知識」、「3 章. 口蓋裂言語」、「4 章. 口蓋裂の言語臨床における評価」、「5 章. 口蓋裂の言語臨床における治療」、「6 章. 乳児期の言語臨床」、「7 章. 幼児期の言語臨床」、「8 章. 学童期の言語臨床」、「9 章. 思春期・成人期の言語臨床」、「10 章. 特別な問題を持った症例」、「11 章. 口蓋裂の言語臨床における今後の課題」、である。

第 2 版の目次では細かい小見出しが付けられ、その章の内容が一目瞭然となっている。内容の記述も新しい知見の追加と共に、かなり細かく書き直され、正確な知識と具体的な臨床実践の手掛かりが得られるように配慮してある。評者は第 1 版の記述について、初心者には多少取り付きにくいのではないかという懸念を持っていたが、第 2 版ではその点も改善されている。

第 1 章では、チームアプローチを前面に掲げ、またチームのコーディネーターとしての言語臨床家の役割を挙げている。これは ST の資格制度が施行され、口

蓋裂を含む言語障害の分野で ST の存在が定着し、障害対策が成熟してきたことを示すものである。第 8 章、学童期の言語臨床では項目の立て方から大幅に書き換えられている。これには新しく加わった著者の視点と最近の学童生活の実体が反映しているのであろう。第 10 章の重複症例では数名が分担執筆し、最近の知見も加えて内容の充実がはかられている。第 11 章、今後の課題では、初版は“〇〇をどうするか？”という問題提起の形式をとっていたが、第 2 版では課題としての項目を明記して、それに対する指針を示しているのが注目される。また言語評価の国際的標準化にも触れている。

さて、本書初版の前身が 1983 年医学書院出版の『口蓋裂の言語治療』であることをご存知の読者も少なくないであろう。この本の著者たちは日本における口蓋裂言語治療の草分けとしてこの領域の開拓、発展を推進して来た ST の先達である。それから 14 年後、その著者等が内容を一新して出版したのが本書の初版である。第 2 版が出版された現在は、この領域の開拓、発展が一段落した時代と考えてもよいであろう。第 2 版はそのような時代の変化を見据えて今までの成果を総括し、今後の新しい発展への引継ぎの意味を込めて書かれていると思われる。本書が新しい言語臨床の出発点となることを期待したい。

(東京大学名誉教授・横浜船員保険病院名誉院長
澤島政行)